

522

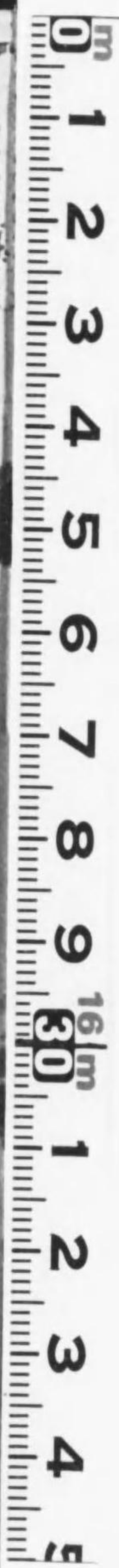
特255

298

初戀の誓ひ



◇ 行發院書民國 ◇



始

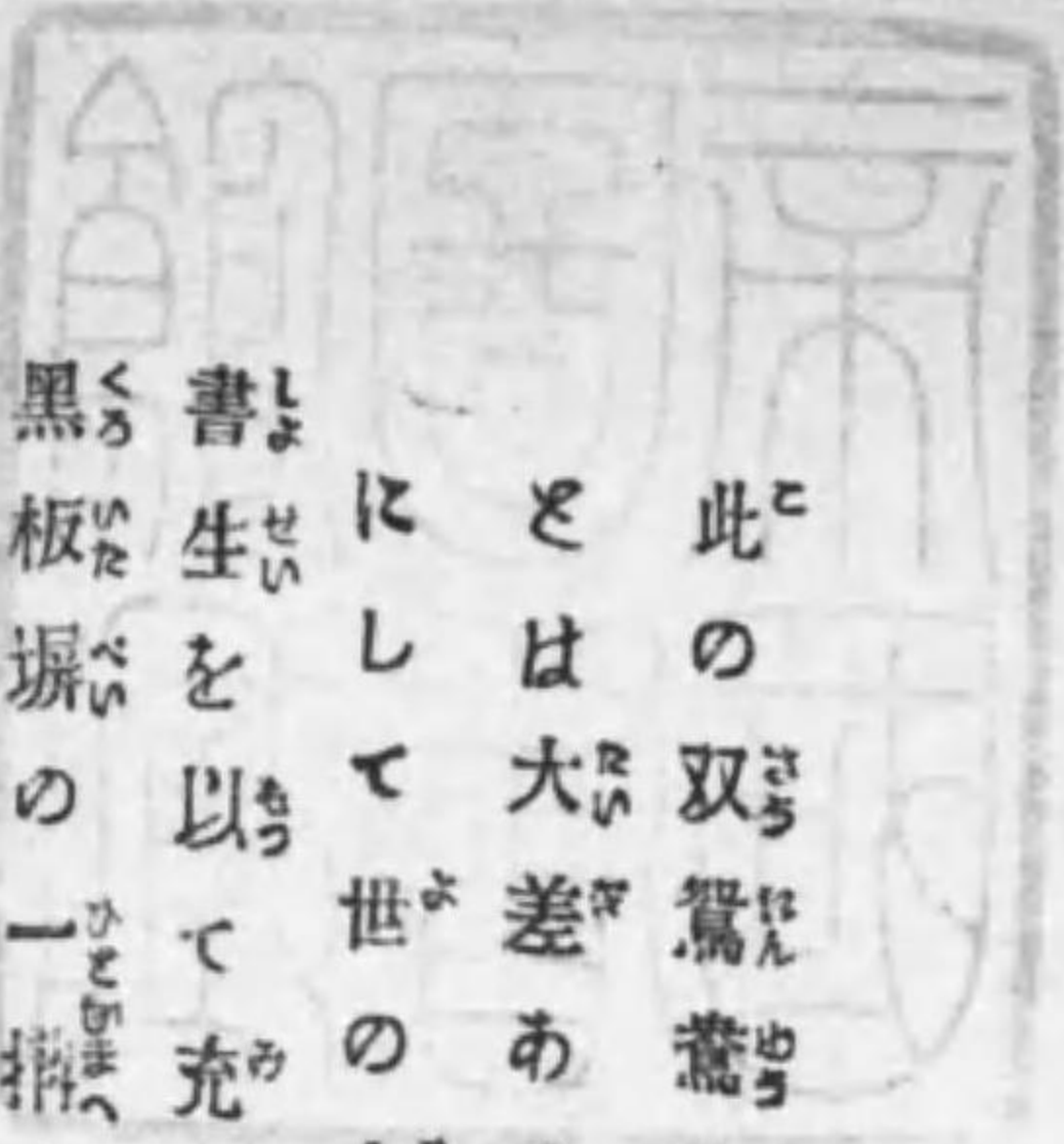


特 255
298

初戀の誓ひ

(1)

此の双駕轡は居士が戯に草せし一夜作り文字結構前篇
 とは大差あるも雅俗相救る亦時に取て一興と此のもの
 にして世の人の笑草となしぬ
 書生を以て充滿したる東京本郷の湯島四丁目に美々し
 黒板塀の一掛は故龍野秀辰とて高等官をも勤めし者の住
 居なるが其子秀一は年の比廿四五生れ得て眉秀て眼清ら
 に剩さへ才富み學高く議論文章尤人を驚かすの語あり父



秀辰死去の後には家計稍衰へけれども遺亡父が物好せる家
 居いと廣く庭の泉水樹木など幽邃の致を極めしが其身は
 文科大學に通學し家に歸れば門を閉ぢ書を讀み學友先輩
 の外には絶へて酒色の交を結ばせ去れば打見たる處にて
 は楚々たる好男子風流狹斜の才子に似たれども其品行大
 に他生に異なり身持正しく氣高かりければ其が艶聞を聞
 きしものなく誰とて之を花柳に誘ふものもなかりける或
 日曜に學友鶴田雲平と云へるもの訪ひ來りて團子坂の
 菊見は如何と云ふに辭み難くて諸共に杖の引て我家を立
 出ける
 本郷の大學の前を直眞に追分をも過ぎ駒込千駄木の邊ま
 へ來しが疎竹門を擁し高梧庭を掩ひて風流を盡せし一僧

の二階家あり龍野は不圖首を擧げて樓上を見上ぐれば一
 人の老夫一人と一人の年まだ若き妙女欄干に憑れて往來を
 見下せり其妙女の顔白きは月下の梨の花を欺き其姿優し
 さは風前の柳の枝に似たり其眼は涼やかにして情の雨滴
 らんとし其眉は畫ける遠山に似て呼ばゞ答えん風情あり
 縁の黒髪丹花の唇之を國色と云はせんば孰れをか絶代の
 佳人と云はんと暫し見惚れ居たりしを目ざとさ鶴田は見
 答め

「オー龍野君茫然しては困るせ
 ど云はれて秀一思はせむ足早に其門を通り過ぐるに鶴田
 は又も龍野に向ひ
 「流石の沈着家も美人の爲には顛倒するぞ見ぬるね

「僕は實に荒膽を挫かれたやうな心持だ所謂柔能く剛を制するとは此事だらふ實に美人だ絶世の美人だ
「彼女には有名な美人が實は我輩の証人で莊敬菴と云ふ醫者の娘だが頗るに婿を擇んで居ると云ふ事だ
「君は其候補者じやアないか
「ナアに我輩は良婿候補者の撰舉權を興へられたばかり

だからつまらんサ
此の一語は龍野の身に取れて亂軍の中に強援を得たるが如く稍勇み立ちて團子坂に到りしが此處の門彼處の畑皆

黄菊白菊を以て充され銘々工夫を凝せる菊人形武藏坊辨慶の坊主武者牛若丸の童形馬上の巴御前大江山の酒香童子など花を組み葉を並べて美事に作りなしたり武者人形

の前に立つは小學生徒多く自己が學び得たる日本歴史中より覺束なき講釋と母に告げ役者似顔人形の前に麻痺を切らする浮氣娘連にして人の手前をも憚らぬ涎を外出の衣物にこぼすも可笑し龍野鶴田は一巡見終りて彼を品し是を評しつゝ立去らんとする折一人の老翁山は紅葉も色つかぬに早や置添へたる髦の霜額の波は堆さるいと穩なる其面色身に高砂織の被布を着て頭に頭巾めきたる帽を被りしが鶴田は老人に行遇ひていと可憐に會釋するを龍野は傍に待ちもならぬ行過ぎんとせしを呼止めて
「此は僕の學友で龍野秀一君です……龍野君此方は僕の証人莊さんです
「さうですか以後お心安く願ひます

「猶御別懇に願ひますとふだ鶴田此から御一所に宅へ來
てお茶なりとむ
圖らざりさ此の老人は彼の樓上に在りし美人の父ならん
とは圖らざりさ今日鶴田に紹介せられて美人の父に交を
納れんとは圖らざりさ今日美人の父に誘はれて美人の家
を訪はんとは龍野は此の三ヶ條なる意想外の大快事に心
も足も空にして莊氏と鶴田とに伴はれ團子坂を再び上
りつゝ千駄木村なる彼の美人の家に至りける去れど此時
まで龍野の意中唯彼の美人の美に戀々たるのみまだ百
年倍老の觀心は芽を出すはどにもなかりしと知れ
外より打見たるには増して家居美々しく利さへ此處等は
雪隠と臺所と板壁一重越の京橋日本橋區と違ひ地面も

ふまゝに買得らるれば主人が好事を盡せし庭のさまいと
面白く植込みし樹木又は木蔭の石燈籠配置を得て幽遠
間雅言人方なし二人は彼の美人の貯立せし樓上に延かれ
しが其人は去りて影もなし失望と落膽とは龍野の快適を
奪ひ風雨の朝に櫻を尋ね野分の曉に女郎花を求むる心地
せしが今にもあれ珈琲と捧げて袂を引開くるものは蓋し
其人なるべしと月末に國元の書留郵便を待つ書生の心し
て樓外の風景庭のけしきなど打眺め居りしにおづ／＼茶
盆を持出しは庭垂育の相摸女なり今は夜店に銀と思ひて
洋白の烟管を買ひし心地して興醒め顔に手を組み居たり
主人は更に無頓着にて二人を相手に四方山の物語果は我
輩は年老ひ世間の事情にも暗さが此の節の條約改正論は

如何との問鶴田は一番我學友に初見參の功を立さなんと
 て答を讓れば龍野進み出で稅權法權の彼我不平均なるよ
 り憲法違背の講釋外交文書の不當なるを辨じ遂に今度の
 改正は我國獨立の體面を傷くるものなりとの説は非條約
 改正派の議論にして一朝完全の改正を爲すは得可らざる
 者なれば恢復し得らる、丈づ、稅法二權を恢復すべしと
 は賛成者の辨なりなと毫厘をも分拆して手に取る如くの
 辨舌莊敬蕙殆んど感服して行末頼母しき若者と思ふ躰な
 り其思につゞいて斯る若者を我子の婿にどの希望も萌せ
 しは問はでも
 其日は遂に彼の美人に接するの機を得ざりしかども敬蕙
 爵と物語の暇に折々二階の下を見下せしに一人の書生花

手なるスコッチの脊廣服を着し流行の山高帽を被りし一人
 の書生體の者樓下の道を往きつ戻りつするを見たり
 波靜けき荒海に甲板の上を運動する船客の如く停車場に
 人待顔して待合所を右往左住する旅人の如く幾度か西へ
 行き東へ來るさまいと訝かし其も散步する人と見れば疑念
 なければ怪しきは彼が運動場を此の樓下の路に限れる事
 なり特に怪しきは彼が樓下を過ぎる毎に二階を見上げ門
 内を窺き込む事なり龍野は不思議の曲者と心付かぬにあ
 らざりしかども敬蕙翁と物語の絶間なきまゝ其如何なる
 故を研究するの暇なくして遂に其日は鶴田諸共辭し去り
 し比は彼の書生も見へざりき
 課業書の研究と文學上の談話の外に唇を開かずし龍野

此頃、は鶴田と遇ふ毎に、團子坂の菊人形は奇麗なりしと
 云ふを端緒として、其歸路、莊氏に立寄りし愉快を語り出で
 遂に一轉して、美人の性質、才徳などを聞き正す事一度ならん
 二度ならんを鶴田は其落花流水と看破すといへども、是れ將
 相應の縁なりと思ふものから彼の美人は芳子と呼び今年
 十八に及びし事、幼より跡見女學校に入りて十分の教育を
 受けし事書を好みて、花外女史と号する事、浮きたる心なく
 して多くは深窓にのみ閉ち籠り當世の男女情交などに趣
 らざる事、其父賢婿を得て之に配せんと欲する事など、事
 むなく物語り聞きするに、龍野は中々感心な婦人だあらぬ
 娘だと聞き度毎に覺ゆるに、洩す替美の辭には十分なる戀慕の
 情の附随するを見て、鶴田は秀一に向ひ若し、莊氏にして合

觀を許さば、君は百年の盟を成すや否と問ふに、口籠る事一
 再にして、恰も藹相如が趙壁を秦庭に奪ふ如き勇氣を面色
 と語氣とに現はしつ、勿論と答ふたり、是より先き鶴田が
 莊氏に至る毎に、敬菴翁は前日伴ひ來し龍野が素姓を聞き正
 し、學校に於て學術の優劣を質問し、彼が性質品行等をも尋
 ねし事、屢なり聞かると、度に委しく説明の勞を執りたりし
 が、敬菴聞て、日比望める擇婿問題の合格者と見定めけん其
 意を鶴田に含ませ置きたりしに、ぞ今龍野が勿論どの一語
 を聞て始めて、敬菴の密意を洩らし其より屢莊家に入し
 て、愈婿の候補者とはなりすましける
 先の日莊家の樓下を徘徊せし曲者は、本醫科大學の學生に
 して、元田闇と云へるものなるが、此の男何處やらの醫者の

子にして其家富み榮へたるものから何の彼のど儀りて過
 分の學資を國元より取寄皆遊蕩に遣ひ棄て芳原に三日流
 連して芳町に四日流連只淫色を三百六十日の課業として
 一分千金に價する光陰を飲めや歌へやの中に消過するを
 才子の本分と悟りて生理學解剖學の書に換ふるに梅曆娘
 節用を以てして閨中間答の豫修を怠らむ彼等の友人は相識
 して色情研究の影功表を贈らんと識せしは彼の友人は相識
 しが此比大學にて舞踏會の流行せし折才子必習の藝術と
 心得て第一番に稽古を初めしが其時豫想通に懇意を結び
 し師範女生徒好榮琴女と自由結婚の開化風に倣ふて結婚
 の約を成し其より互ひに情交を通じける去れども固より
 舞氣者の元田なればいつの間にか莊の妙を垣間見けん如

何にして彼の美人に近つかば予が嬌辨飽舌怎で情を通せ
 ざる事のあるべきと獨胸のみ痛めしかども其機會なきに
 困ふじ果てせめては半面をなりとも伏拜みて心遣にせむ
 ものど扱こそ其が樓下を往來するにぞありける
 失望にも程こそあれ戀しき其人け影をだに見せを學校に
 て折々見かはず顔の普生二人まで其が樓上に在るを見て
 は若しや彼等は……思來れば千統萬樓こらこうしては居ら
 れぬと竊かに謀を運らしけるが思付さし事こそあれ吾隣
 家なる下宿屋の主婦はもと彼の莊家の乳母なりし由此を
 謀主とするに若かぞと驟かに馬井屋に下宿換して間がた
 際がな主婦を生捕らんものと金を撒散らして人望を買ひ
 しによつばさい、書生さんには遠ない三疊の貧乏書生は來

年卒業と觸れて威張る癖又下宿料の日延元田さんと月
と體は違ふと折下女への自慢話を聞く均しく願望
成就此機失ふ可らむと勇み立ち或夜主婦を鯛屋に伴ひ尋
常の書生一ヶ月半の學資十圓を紙に包みて前に差出し實
は莊の娘に云くと頼めば婆は札を見て貰ひ度のは精
去れど此懸賞束なさに滅多に受引難しと思へど跡の言
拔はいくらもあらずと兎に角やつて見ませうと聞て元田
の大恐れ早や羅生門に鬼を得し心地しける

「お嬢さまへ彼方も左様に内にばかり居らしつてばお身
體にも障りませうからちつと妾の處へお遊にいらつし
やいませいな
「グツテお前若い書生さんが澤山下宿しておいでの處だ

もの大爺に叱られるワ
「なんの彼方元の乳母が處にお遊にいらしつたからつて
お叱り遊ばすものですかそれにて彼方妾の處に元田さ
んテ方がいらつしやいますか面白い繪本やなんか澤山
持ていらつしやるノ梅暦だの娘節用だの色々の本がで
ざいますから見にいらつしやいませいな
「そんな猥褻な本を……女の讀むものじやアないよ
「オヤそらでございますかかけれども元田さんテ方は醫
學部の書生さんですが風采がよくてお優しくお國は
お金持でア一云ふ人が書生さんの親玉ですよそしてホ
、、、そして彼方ホ、、、あの貴嬢にぞつこん惚れ抜
いてホ、、、イエあの貴嬢がお學問がお出來なさるつ

て事を聞きなすつてせむお目に掛りたいと云ていら
つしやいます
「なんだネお前はそんな事を妾に云つたのが大爺に知れ
て御覽お前は明日から此處へは來られないよ

「エ、
左程辨舌をも費さぬうちに脆くも敗北せり貫ひし十圓を
如何せん歸れば元田が待兼ねて様子如何にどの尋問流石
無駄なりとも答あられを處女の事なれば手取早くは行
と云ふに何分頼むと又も五圓まだ都合はつかぬかいつ遇
せるのだと日毎の催促今更出來ぬとも言兼ねて摺た轉ん
だど日又一日
元田將來醫學士の未來の夫人好業琴女は近來情交の稍冷

なるにつけて人の噂を聞けば其醜行汚聞少からを心に厭
惡を生むるにつれて他の俊才を求めんどの念萌せし或時
通俗講談會の傍聴せんとて簾籠の書に似たる古洋服を引
きり鳴革靴を内八文字に踏鳴らし洋杖を手にして講義室
へと罷出でしに其後彼の龍野秀一も辯士の一人として
講壇に登り日本婦人は古より男女同權の榮を得し云
へる論題にて歴史に徴して故事を引き我日本の婦人倫
理上高尚なる同權の光榮を保ち來し事實を証明する辯舌
爽かに議論面白く人々拍手喝采を絶ざりしが分けて琴女
は其議論辯舌より其容貌風采に感動し始終聞とれ見と
れ居たり荷も新教育を受けし妾が輩は斯る紳士を得て夫
と傳ん事畢世の希望なり神よ妾が衷情を憐み彼の青年紳

士と情交を結ばしめ玉へアーメンなど、讀書の暇唱歌の後神かけて心に祈りけり彼の元田とは情交稍冷なりしまでに往來しける或時馬井屋に到りしに彼の講談會に見初めし青年紳士も我より一足前に奥座敷に通りしにぞ彼の奥座敷に下宿し玉ふにやと素知らぬ顔にて主婦に問へば四丁目なれど折節此處を筋ひ玉ふもへ妾も御別懇に申すなりと聞て琴女は喜ぶ事限なく此の主婦をして事を謀らしむるに若かきと其後元田に用はなけれども折々馬井屋を音づれてなにくれと心をつけ十分主婦の氣を迎へてモ、よい比と琴女史は主婦を饅屋に伴ひゆき彼の龍野ぬし

に交りて教を受け度く思へども紹介なければ妾より打つけには言出で難し御身我に代りて此由をぬしに宜しく取成して淺からぬ契を結ばせ玉へ女は相身互ぞかし秘めよ人にな告げなかなしこと金十圓を紙に包みて主婦が前に差出せば呆る、事半時ばかり此人は元田ぬしと縁ありと聞くに彼も此も揃も揃ふて此の始未似たもの夫婦とは此事かと暫し返事もせざりしが金を見ては後に退ぬ強慾ものいと容易く受合ひける

「オー龍野さんいらつしやいまし鶴田さんは今お出ましになりましたがマア一服召上りませイエ少しお話しください事があるのですなんぞお寄りなさいナほんどに飯位じやア承知しません」

「なんだかちつとも分らないが奢るべき理由があるなら
 奢らう其じやア鶴田の坐敷を催りやうか子
 「そうなさいましサアお坐蒲團をお烟草を差上げませう
 粗業ですヨアノころなんですマア男のいゝのは徳なも
 んです子ちつと裏二階の鬼田さんなんぞへあやからし
 てあげたいワよんべ振られたつて佛頂面して歸つて來
 ましたヨ
 「なんの話だか分らないが一昧どふ云ふ譯かネ課業の時
 間がくるから早く話して貰ひたい
 「アノころなんですヨ彼方は御存知ありませんか知らん
 が好業琴と云ふ女書生さんが彼方に首丈なんですどふ
 かお交際を願ひたいから縁をして呉ろつて妾を拜んば

かりにして願ひのです簪を取らぬは男の恥ですから叶
 えておやりなさい十是が一生奥さんになさるのじやな
 しほんの一時のお慰ですヨ
 「なんだ失敬極まる何の話かと思つたら汚らはしい話だ
 此から今一度左様な話をするなら鶴田にも忠告して轉
 宿をさせますなんだ馬鹿くしい
 疊を蹴立て、歸り行けり今の世の中に堅藏にも程のあつ
 たものだと籠の鳥を逃した心地彼の琴女はお玉杓子の再
 生とも云ひつべさ顔を磨き立て、毎日く主婦へ首尾は
 如何にと催促十圓の金は已に春木座見物と一枚の寛袍を
 受出して其半を費せり今更返すに返され仕事は先方か
 らはづれる進退爰に窮せしが儘よ跡ばどふなりども取繕

うはんと琴女に向ひ兎に角相手は堅藏なれば急には話が
 出来ぬと偽り体よく追返す事此に二三十遍
 元田間馬井屋の主婦に欺むき取られしも巳に三十圓ば
 かりに及びけれども彼是と言援けて時明ねば翁に莊氏の
 事情を探り見しに前日樓上に居たる二人の書生は龍野秀
 一と鶴田雲平にして鶴田の煤に因て龍野と莊の娘と結婚
 の約を成せしと聞き妬さ口惜しき譬へんに物なく何と
 して龍野と莊とを離間せんと企てけるが良策を考へ出
 しけん事云々と主婦に頼めば實に左なり誠に妙なり爰も
 言葉盡して娘の氣を動すといへども容易く従ふべき氣
 色なし是れ全く龍野ある故なり此の謀を行ふて後術を
 ぐらすに若く事なしと手筈を定めて莊家へ赴き敬菴夫婦

へ挨拶すみて扱娘芳子に打向ひ妾嬢さまの乳母となり斯
 く御成人遊ばしてお學問も上達なされ書をさへ巧に遊ば
 すと承るのみ一枚の項戴なせし事なければ今日はお筆を
 賜はらんと業々参り侍りしと云へば夫婦は打喜び其々娘
 に勸むれば耐み難くて筆を執るに番は妾が望あり鴛鴦の
 繪をど所望に任せ絹を展べて筆を染め葦に鴛鴦を認め終
 り花外女史と落款して渡せば喜び押戴き暇を告げて歸り
 ける
 鶴田は莊敬菴を証人として學校へ入學なしたりしかば其
 指圖に因りて嘗て莊氏に乳母たりし馬井屋に下宿なした
 り固より十餘人の同宿なれば同じ竈の飯を食ふも顔のみ
 見て名乗り合はぬもの多し去れば彼の元田と初は互ひ

に知らざりしかども後いつしか言葉をかはし其部屋に
も往來する事あり或日食後に元田の部屋を訪ひたりしに
間は常に似て打交れて言葉少に物思氣なり鶴田は訝しげ
に之に向ひ

「君どうかしたんですか病氣か子

「ナアに病氣じやアないが少し……」

「いやにふさいで居るなア相變らずモニ一の心配じやな

いか

「そんな事ならい、けれども實に精神を痛めて居し事か

あるんだ

「アー我輩に話せない事だ子郷里の方から歸れどでも
云ふて来たのか

い、やそんな話じやない實は君だから話すが僕は或る
貴嬢と結婚の約の結んだけれども先方の親は不承知で
外に婿を擇んで居るらしいから困るノハ契約の印に先
方から贈つたのは此だ此の一枚の繪の爲に僕の精神は
亂れて糸の如しッ

取出して示す一葉の繪は昔に鴛鴦落款は花外女史ハテナ
花外女史とは同名異人か彼の淑徳の聞は高さ令嬢にして
此の放蕩書生と婿を約すべき道理なし去れど此の道はか
りは思索の外とやら云へり沙汰の限り言語同斷兎にも魚
にも問究めばやと此は彼の騙込なる莊芳子ならせやと云
へば然りと首肯けり然りの一箱千鈞を繋げる一髪の切れ
びに均しよるやとは思へども正しく此の書を所持なすか

色云ふ扱は此事隠なく世間
 飛龍野をなだめ置きて飛ぶが如く
 と筋に敬菴老に告たるに夫婦は痛く打驚き是れ決して信
 老可ら老彼の畫は馬井屋の主婦娘より乞取りて持歸りし
 むのなり其を元田に興ゑたるに彼れ輕薄の放蕩もの其畫
 を友人に示して艶福を誇りしに極まれりと聞て鶴田も安
 堵せしが大事の娘に濡衣おはせんとせし彼の乳母こそ面
 借ければ呼寄せて屹とたしなめ其繪をも取戻さんどて使
 を遣はしければ留まらぬ其日は朝より雪降りたれば雪見にとて
 向島に行きし留まらぬ其日は朝より雪降りたれば雪見にとて
 元田は前日より彼の繪を諸友に示し我艶福多きを誇りけ

らは疑ふべくもわらむ彼の龍野秀一は正直の君子なり之
 を聞かば破談は必定中間に立ちし予も面目なし當時の貴
 嬢は口に海徳を唱ふれども其行は夜父なり妖狐なり頼み
 難きは人の心かなと疑心暗鬼を作り出しては彼の芳子が
 龍野に面會する毎に其面報かりしは心に恥ぢて然りしか
 予が彼の家を訪ふ折に容易に出來らざるは果して予を忌
 みしものかどまで思ひ此は我親戚の一大事此儘には棄置
 難し敬菴翁に遇ふて此の事實を明さんかイヤ其前に龍野
 の知る知らざるを問ひ試みばやと程よく元田の部屋を辭
 して湯島四丁目なる龍野の許を訪ひしに彼は不快の色面
 に満ちたり其由を叩くに今日學友より芳子の不品行を聞
 さ得たり因りて破談を申込まんと今書面を作る最中なり

れば半は疑ひ半は信じ忽ち友人中の評判となり遂には龍野の耳にも入り大に女徳の敗れたるを歎き聞さ仕舞したりと喜びしが今日鶴田にも其由を告げたれば双方の確執疑なしと此繪は父母も許して書せたりとも知らぬ計ひの中れるを獨り心に誇り居けるこそ淺果敢ない折から馬井屋の主婦は此機を失はせ貫ひし金の報ひせんとて元田の部屋に來り

「先日の繪の事が龍野さんの耳に入つたものですから大變怒て破談にするどつて掛合中だそうです其で芳子さんが大心配をしてせひ龍野さんに遇せて呉ろ自分で言事をすると妾へ頼んだのです其處で妾が不圖考へ付さ龍野さんは外に好きな女があるのだから其人に遇せる筈

にして雪見がてら向島の八百松に逃出し眞暗な茶室であ遇せ申そうと云ふて來ましたのは實は彼方を龍野さんにこしらなて芳子さんにお達せ申そうと思ひますかどうか

「成ほど是は妙計そんなら我輩は龍野に化けて

「跡から八百松にお出なさい妾は先に芳子さんを連れて向島に行きお待ち申して居ませう點燈比に茶室へは妾がお案内をいたします何處までも化の皮を願はしてはいけません跡がらき、ませんから

「手筈を定めて元田閣は其日雪を冒して車を向島に飛せたり馬井屋の主婦は一足先に立出でしが莊家へは尅かせし彼の好菜琴女の下宿に赴き此迄賞ひし金の體なと述べ

終はり

「實はネ彼方アノ龍野と云ふ人は恐ろしい堅藏だと思つたら莊とか云ふ人の娘で芳子と云ふ人に惚れて惚抜いて居るのです其で今日は雪見がてら向島に行て暗くなつてから茶室で芳子さんにお達せ申しませうと云つて連出す約束にしたのですと云ふのは彼方を芳子さんにこしらゑてそらして龍野さんにお達せ申そらと思ひますがおどふです

「それでよくつてはどふかそらして頂戴ナ

其じやア妾と一所にお出なさい屹ト化の皮をあらはしちやいけませんヨ跡がさ、ませんからサア行させう雪で路がひどいから二人引にしませう

向島の花は天下に知らざるものなけれど雪の景色も又格別なり見渡す限白糺糊として銀の礫を投ぐるが如く川を棹す渡守は渚に立てる鷺に似たり此處は水神の森の八百松樓奥の一間は莊一家及び龍野鶴田諸共に順に催せし雪見の宴一旦疑を起せしも春風に解くる氷の如く妨の雲拂ひ去り却て堅く結ぶ縁のいとも睦ましげに打語らひ盃の歡も次第に廻り各詩歌思ひくく或は吟じ或は歌ふ彼方の一間は歌妓を呼集めての雪見酒酔や廻りけん聲張り上げて

くろかみのひすばれたるおもひをばどけてねた夜のま
くらこそひどりぬるよのあだまくら
歌ひも終らせ又高笑ひしめやかなる中に春めきて興つく

初戀の誓ひ (終)

べくも見へざりけり其が下には茶室と覺しき一間の窓を
 くり開けて外面を眺むる二人の男女雪明りに顔見合せ
 「や彼方は元田さん面目ない
 「や彼方はお琴さんこりやどふじや

内務省納本濟

昭和七年十一月二十日印刷
昭和七年十一月廿五日發行

不許複製

編輯者 大阪市東淀川區木川西ノ町三ノ三三
發行者 宮本彰三

印刷者 大阪市西區阿波座上通三ノ三九
國民書院印刷部

大阪市東淀川郵便局前

發行所 國民書院
無替欠板六九五七〇番

終

